

大地に刻まれた西会津の足跡 地形からみた西会津の歴史 その4

—上野尻宿—

文：田崎 敬修

上野尻宿は宿場町ができた年代がはっきり分かっている珍しい宿場町です。『新編会津風土記』によると1674年（延宝2年）に現在地から南に約940mにあった村を移して上野尻宿を作ったそうです。その村跡は古屋敷と言われ、JR踏切向かい下馬落し川付近（『下野尻万覚書』菊地憲著）だそうですが、かつての位置は不明です。両書から推測するとかなり阿賀川沿いだったようです。会津藩は、なぜ新たに下野尻宿のすぐ南隣に上野尻宿を作ったのでしょうか。当初は、下野尻宿の陸運と舟運の扱い量がそれ程多くなかったため滞りなく処理できていたのですが、時代が進むにつれて扱い量が増加し処理できなくなったのでしょう。そこで、下野尻宿のすぐ近くに上野尻宿を新設し、両宿場で分担して駅所の仕事（荷物の管理事務）をすることにしたのだと思います。

旧村は、阿賀川寄りだったため宿場町としての町割をするには狭すぎたのでしょう。そこで現在地に、非常に計画的な長方形の町割がされた上野尻宿ができたのですが、水路の水に困りました。現在上野尻の水路の水は西側山地の沢入堤から引いており街中央付近で南北に分かれて流れているそうですが、宿場の水も全く同様であったと思います。

上野尻村は、段丘で畑地にしかない土地を水田にするため西側山地に堤を作り水田開発を推進しました。『新編会津風土記』には沢入堤（1650年築）・伊蘭沢堤（1654年築）・宮沢堤（1656年築）の3つが記載されています。

『町史第4巻（上）』「文化13年 後世のために寺本堂に掛けた大沼堤の保全仕法書原文」には上野尻村用水堀を作るため赤羽の山抜けでできた沼（大沼）に堤を1671年（寛文11年）から作り始め、1798年（寛政10年）に完成したとあります。この大沼堤が完成するまでには何度も工事中決壊したため反対運動も起こったのですが、藩では小川庄・山三郷三組・野沢組の大勢の人々を動員しようやく完成したようです。さらに1838年（天保9年）には新たに小蟹沢堤を作るにあたり水利で白坂村に迷惑をかけないという誓約書を出して作っています。江戸時代後半になると上野尻宿に中心的川湊ができ、陸運と舟運の合流地として大いに発展し、1791年（寛政3年）～1819年（文政2年）の間、野沢・山三郷・津川の3代官所を統括する野尻郡役所が設置され政治経済の中心地として賑わいました。



▲ 国土地理院発行 1/2.5万地形図「野沢」
拡大・着色

今月の表紙

今月は、6月24日に行われた西会津小の鼓笛パレードから。凜とした表情で演奏する児童たちの姿が印象的で表紙の写真にと決めましたが、背景に複数の電線が…。ふと「五線譜に見立ててはどうだろう。」と思ひ、音符スタンプを配置してみました。見ているだけで、鼓笛隊の演奏が聞こえてくるような1枚になりました♪

編集後記

先日、人生初の風鈴を買ってみました。風が吹くたび「チリン、チリン」と綺麗な音色。夏の暑さも和らぐ気がして不思議です。風鈴には昔から疫病や災いを払う魔除けの意味があったとか。先人の知恵や願いが込められていると知り、しみじみ…。暑さに負けず今年の夏も元気に過ごしたいですね。（三留）